令和７年度８０２０公募研究事業
研究報告書抄録（採択番号 25-3-07）

研究課題：「歯科標榜のない病院における多職種協働型の歯科医療提供体制のモデル構築：一関病院における取組み事例の分析」

研究者名：竹原 祥子[1)]，小川祐司[1)]，佐々木勝忠[2)]，中嶋晴美[2)]，佐藤隆次[2)]

所属：1)新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻口腔健康科学講座

2)社団医療法人西城病院　一関西城病院

【目的】

歯科標榜のない病院における口腔管理体制の実態と課題を明らかにすることを目的として、一関病院における歯科回診の取組みを整理し、歯科介入の実施状況および介入後の経過を検討した。

【方法】

2025 年 1 月から 12 月までの 12 か月間に、歯科衛生士がスクリーニングを行い歯科医師の診察が必要と判断した入院患者 77 名を対象に、歯科介入内容および介入後の状況を後方視的に分析した。また、言語聴覚士、社会福祉士、管理栄養士を対象にフォーカスグループインタビューを実施し、医科歯科連携の実態と課題について、Braun and Clarke の thematic analysis の手法を用いて質的に分析した。量的解析と質的分析の結果を統合し、歯科標榜のない病院における口腔管理体制の機能と課題を検討した。

【結果】

歯科介入を受けた 77 名の平均年齢は 81.2 歳であり、男性 33 名、女性 44 名であった。栄養摂取形態は、非経口摂取 15 名（19.5%）、経口摂取 62 名（80.5%）であった。歯科介入は経口摂取患者に対する義歯関連治療が多くを占め、食形態の改善や食事摂取量の増加等の改善が認められた症例が認められた。一方で、死亡や退院により評価困難な症例も多く認められた。歯科以外の医療職に対するフォーカスグループインタビューからは、口腔問題は主として摂食嚥下機能や栄養状態の問題として認識され、歯科衛生士への非公式な相談を通じて歯科介入へとつながる構造が明らかとなった。また、NST やミールラウンドが多職種間の情報共有の場として機能していた。

【結論】

歯科標榜のない病院においても、歯科衛生士を中心としたスクリーニングと非常勤歯科医師による回診を組み合わせることで、口腔管理を実施できる可能性が示された。特に、義歯関連治療を中心とした歯科介入は、摂食嚥下および栄養管理と関連する口腔問題への対応として重要である可能性がある。一方で、本研究は後ろ向き研究であり、対象が歯科介入につながった患者に限定されるため、病院全体の歯科医療ニーズを評価するものではない。今後は医師および看護師を対象とした調査を追加し、より包括的な医科歯科連携モデルの構築を検討する必要がある。